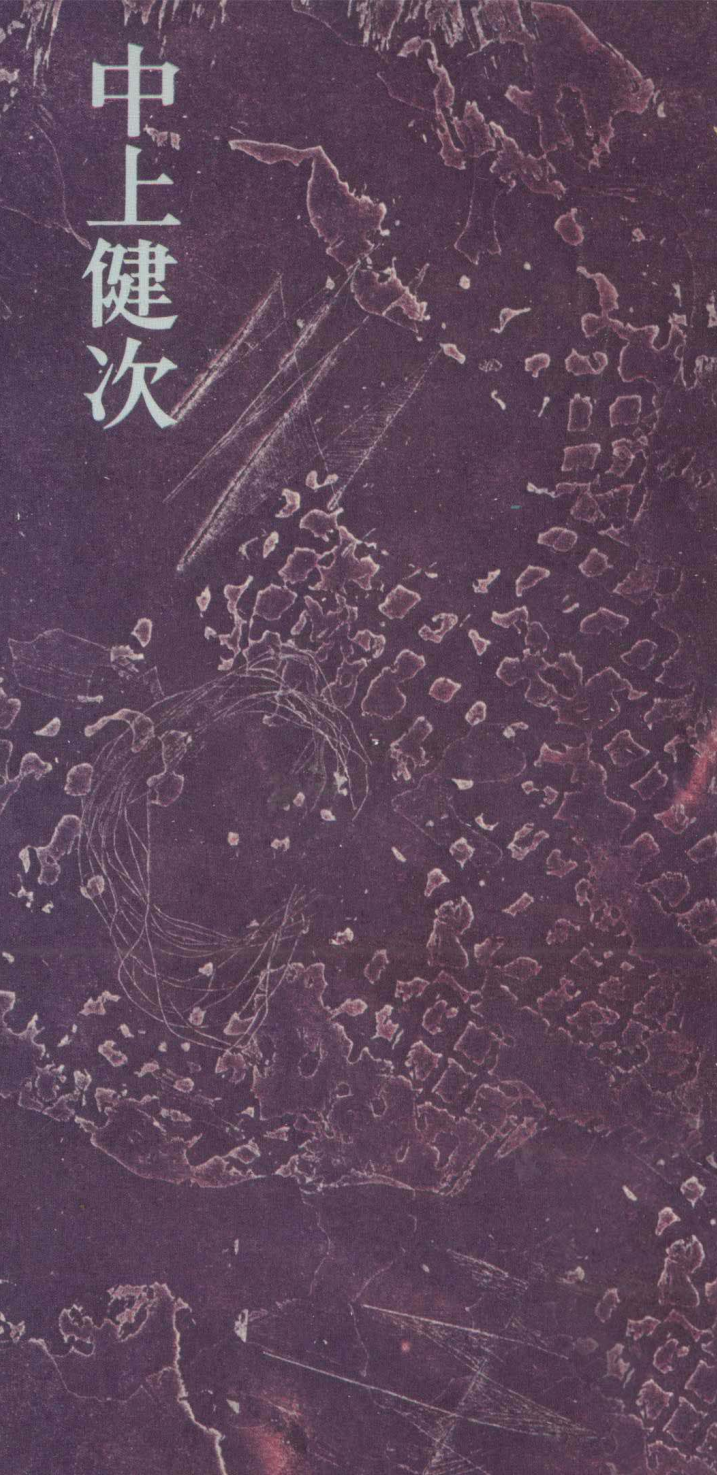


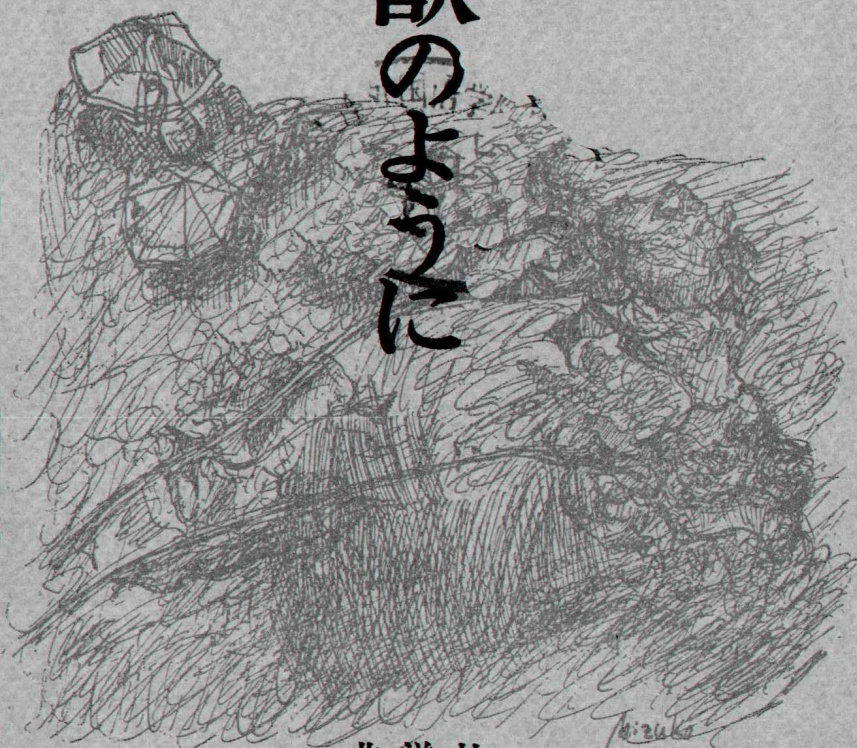
中上健次

鳥のよう  
に獣の  
ように



中上健次

鳥のように獣のように



北洋社

### 著者略歴

1946年和歌山県生れ。和歌山県立新宮高

校卒。作家。

著書『十九歳の地図』『鳩どもの家』

『岬』『蛇淫』

### 鳥のように獣のように

昭和五十一年六月二十日 第一刷発行

昭和五十三年九月一日 第二刷発行

著者 中上健次

発行者 伊藤金吾

発行所 株式会社北洋社

東京都千代田区富士見二二二

一〇二

電話 東京（二六四）〇五五一

振替 東京 一一三三二四三

印刷 豊国印刷株式会社／製本 大製株式会社

落丁本、乱丁本はおとりかえします。

# 目次

# I

◇二十代の履歴書 4

紀州弁 5

母系一族 9

萎びた日向くさい南瓜 13

処女の秋刀魚 16

鳳仙花の母 19

\*

男に結婚の決意などいらない 21

わが友 23

鈴木翁二 23  
柄谷行人 24  
保高みさ子 25

火宅の雪 27

土のコード 31

\*

町よ 34

蒲田 34  
善光寺 39  
天王寺 44

\*

働くことと書くこと 49

センチメンタリズム 53

ピクニック・スト 57

初発の者 61

アングリー、ハングリー 65

不思議な場所 69

作家と肉体 73

## Ⅱ

◇私の道楽 82

雪と「獣」 83

\*

犯罪者永山則夫からの報告

時は流れる…… 123

親爺を殴り殺せ 128

地図の彼方へ

136

肥大した事実

136

トロツキスト氣質

139

事実の肯定 悪の自由

141

犯罪はレトリックである

144

### Ⅲ

◇酒一筋に魅せられて……

148

いま変身について書くこと——フィリップ・ロス『乳房になった男』

149

わがノッティンガム——私とシリトー

163

姉の自由・アナーキー——円地文子『花食い姥』

165

異国での確認——辻邦生『夏の砦』

173

『コートームケイ』の小説——大江健三郎『洪水はわが魂に及び』

179

\*

読書ノートから

186

古井由吉『水』

186

金鶴泳『石の道』

183

古山高麗雄『蟻の自由』

190

佐木隆三『年輪のない木』

192

阿部昭『あの夏 あの花』

194

柄谷行人『意味という病』

196

映画ノートから 198

「告白」と「やさしい日本人」 198

大島渚「儀式」 203

アイバン・パサー「生き残るヤツ」 208

\*

方位 73 221

柔かい石塊としての己れ 221

おどろくほど楽天的な随想 224

作家の背後にある「関係」 228

自同律に不愉快を表明する多くの自意識 242

小説の新しさとは何か 247

後記 251

初出一覧 253

「北国の帝王」 210

「統激突カージャック」 215

書き手の自意識などはない 231

事実も事物も明晰である 235

なんとまがましい音楽か 238

鳥のように獣のように





## 二十代の履歴書

来る日も来る日も、ジャズばかり聴いていた時期があった。それが五年間ほど、続いた。ジャズを聴いた店を、思いつくままにあげれば、「ジャズ・ヴィレッジ」「ヴィレッジゲイト」「DIG」「木馬」「ニューボニー」「ヴィレッジ・パンガード」「ビザール」「キャット」「アカシア」

ジャズが好きでたまらない。コルトレーンが好きでたまらないと思った。

西武線沼袋に住んだ頃は、いつも歩いて新宿まで出た。職なしのチンピラ風の、彼らや、オイラが、スケアナ奴を尻目に、たとえばコルトレーンを、テイラーを、ある時はデビスを、スキヤットしながら町を行く。金を持っている時、駄菓子屋で、パンを買った。コロッケを買った。それを食いながら、歩いた。マリワナ、エフェドリン、ハイミナル、ドロラン、ソーマニール、ナロン、くすりは手に入る限り、なんでもやった。しかし頭も体も狂いはしなかった。くすりのようなジャズ、知りたての女の、よがり声のようなジャズ、注射器にすいあげられた血のジャズ、魂のジャズ。

ソメヤという男が、沼袋のオイラの部屋に居ついていたことがあった。双方、女を連れて舞いもどった時は、気をきかして、つけた。ほんの二、三日前、その男の消息がわかった。死んだ、と昔の仲間の一人、テツが電話で言う。たしかに、正式の、世間様向けの履歴書には書けないその五年間ではあった。まっとうに、生きたい、と思う。

世間様向けではなく、昇って沈むお天道様への、まっとうだと言おうか？ 足を洗って以降、ジャズを聴くことは、ほとんどない。

## 紀州弁

紀州に生れて、紀州に育った。しかも、紀州の一端っこ、川ひとつ渡ると他県に出る新宮という町で、である。風土は、そこからどんなに遠く離れたとしても、この身を、縛る。山々が、重なる。それも、中世の頃から延々とつづいたあの熊野詣の山である。とび抜けて高い山はない。だが、山だらけである。不意に、海がある。やはり、これもあの、補陀落渡海の、海である。漁港らしい漁港は、一帯にない。せいぜい勝浦の、小さな港だけである。

新宮も、三輪崎も、佐野も、昔の本によく出てくる。新宮は、海と山にかこまれた猫の顔ほどの、三十分もあれば、くまなく隅から隅まで自転車で回ることが出来るところである。

紀州の歴史を見て、いつか驚いたことがある。戦国の頃、武装軍団の二つ、雑賀と根来が、ここにあった。いや、熊野、九鬼水軍があった。血わき、肉おどる土地なのか、と思ったのだった。

一人の小説家に、この風土とは、何なのだろうか、と思う。すぐ喧嘩腰に物を言う。人が、右と言えば、「左」と条件反射の如く反対意見が口をついて出る。キメ言葉を吐きたくて、うずうずする。十九歳の頃から、小説を書きはじめ、同人誌「文芸首都」に原稿を持っていた頃、さながらぼくは、この風土でつくりあげられた申し子のようなものであった。喧嘩につぐ喧嘩、毒舌につぐ毒舌だった。なま

いきだった。あう人ごとに、そう言われた。心外だった。

いまから思えば、それは、紀州弁のせいなのだ。そう、なすりつける。紀州弁、いや、新宮弁には、敬語、丁寧語がない。

「この小説を、あなたは、いかが思われましたか？」

そう合評会で、目上の人に訊くとする。それを紀州弁にすると、

「この小説を、あんた、どう思たん？」

となる。これは女言葉である。それを男のぼくが、使って、それで敬語、丁寧語の代用にする。男言葉では、

「この小説を、あんた、どう思たん？」

となる。しかも、紀州弁のあのイントネーションで、である。ことさらてらわずとも、紀州弁だけで、充分、なまいきである。それなのに、さらに、地方出身者特有の、言葉が相手にうまく伝わらんのではないかという錯覚が起こり、言葉に言葉を接ぐ。なまいきに、なまいきを重ねる次第に、相なる。

紀州弁、新宮弁の特徴に、いまひとつ、「いる」という助詞がないことをあげる。

「なんな、そこに、あったんか」それを、標準語にすると、

「なんだ、そこに、いたのか」となる。よく、東京の人たちに、人間を、物が在るように言う、と、わられた。

さて、紀州というその風土に生れた小説家としてのぼくは、敬語、丁寧語のない言葉を血肉に受け、人がいるのではなく、在る、在ってしまう世界を書くかとしているのだ、と言えば、自己解説しすぎるだろうか？

一人の青年が、土方として、ここに在る。決して、それは、「いる」のではない。まず、肉体として、

在る。汗を流す。ズボンの裏をひっくり返すと、体から流れ出た汗が、乾いてしまい、白い塩の結晶になつてくつついてゐる。また、働く。

上京して、長いこと、フリーテン生活をして、物を書きながら、職を転々としてきた。職のことごとくが、肉体労働だった。そのどれにも、肉体労働ほど、人間の頭を試すものはないと思ひしらされた。頭、それを知識と知性、心理と意識と言おうか？ 物といつても相對するわけである。土を一日ほじくり返す土方が、もし、いつも心理や意識の袋小路にはいり込んでしまふしかない人間だとしたら、何日それに耐えられるだろうか、と思うのである。そして、言葉を書かないアランやホフファとも言ふべき人たちに、ぼくは、随分出会った。彼らは、人間は、「いる」のではなく、「在る」のだということを知っている。

「いる」より、「在る」が、非文学的なのである。それがよい。だから「在る」ことのところよさは、言い換えてみれば、非文学的なもののところよさかもしれない。たとえば夜勤明けの朝、採光用の天窓からの明りで、色が黄金にみえるボルト、その物の輝きを、どう伝えたらよいか？ 物質的恍惚としか言えぬ経験なのである。ボルトと、ぼく自身が、ここに在る。飛行機に貨物を積み終え、ドアをロックし、さあ、走れ、翔べと馬にでも言うように、ジュラルミンのドアを、たんとたたいた時の、ジュラルミンの手ざわりである。飛行機が空を翔ける馬のようだと、レトリックを言うのではない。物とぼく自身の、交感のようなものである。「いる」ことではなく、「在る」ことが、こころよい。標準語を使う標準人のように「いる」ことを言いはじめると、この世界に、生きること、臆病風吹かすことになる。

紀州で、骨の髄まで出来ている、とぼくは、言ってみる。不思議なところである。房総に、紀州と同じ地名、勝浦、白浜がある。北海道にもある。しょうゆ、木遣節、筏の組み方、それらは紀州人が、関東に広めたのだった。アメリカ村というところも、紀州にある。そんなことを言うと、人は、紀州ナシ

ヨナリズム、熊野ナシヨナリズムだと言って、からかう。

一年に二回ほど、矢も盾もたまらず、紀州新宮へ帰る。東京へもどって来て、三カ月もすれば、正月のサーカス、二月の御灯<sup>おとう</sup>祭りと、紀州恋しさがつのる。恋しさが、恋しさの胸苦しさが、そこを舞台に小説を書かせる。これは、山紫水明でもなくなった故郷へ、ゴマのすりすぎか――。

## 母系一族

ある時、母と電話でこんな話をした。

「あんたの骨、死んだらおれにくれよ」

「どんなにでもしたら良え。死んでもた後のことなど知らん」

「あんた死んだら、親父の墓にいっしょに埋めるのが、普通なんやろが、先に死んでいる自分の子、一人で放っておくのかわいそうやろが。おれが一つ墓つくるから、そこにみんなで、入ろ。足の指の骨でも良えから、おれにくれよ」

「なんでも良え、気が済むようにしたら良えよ」母は黙りこむ。電話口で黙りこんだ母の姿を想像し、自分が、母に対して単なる子の領分をこえて、物を言っていることに気づく。つまり、ポリネシアの未開人としてである。このような会話は、母も、母の子であるべくも、けっこう楽しい。母は、徹底して唯物的である。子供のいかなる情念の病氣にも心をひらきもしないし、耳をもかさない。火葬場で焼かれて骨という物質になり、その物質がどのようににも意味や象徴など持ち得ない、と言う。奇妙な女である。

いや奇妙なのは、子であるばくなのかもしれない。どうも自分の体の中、心の中に、ポリネシアの未